

スポーツ庁委託事業

# 「Special プロジェクト2020」

平成29年度成果報告書

弘前大学 教育学部  
平成30年3月

## I 事業趣旨

2020年には東京パラリンピック競技大会の開催が予定されている現在、選手の強化のみならず、多くの障害者がスポーツを楽しめる環境を整備することにより、障害者スポーツの裾野を広げていくことが重要である。

現在、障害のある子供たちが、継続的にスポーツ活動を実施できる環境が整っていない状況であるが、特に青森県においては、障害児・者が継続的にスポーツ活動を実践できる環境が十分な状況ではない。

本状況を踏まえ、本学と教育学部附属特別支援学校（以下「附属特別支援学校」という。）は、スポーツ庁委託事業「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」の委託を受け、平成28年度の1年間をかけて、障害のある人と家族等それらを取り巻く人々の障害者スポーツに関する興味・関心を一層高めるとともに、本学及び附属特別支援学校が障害者スポーツ振興の地域拠点となることを目指して活動してきた。

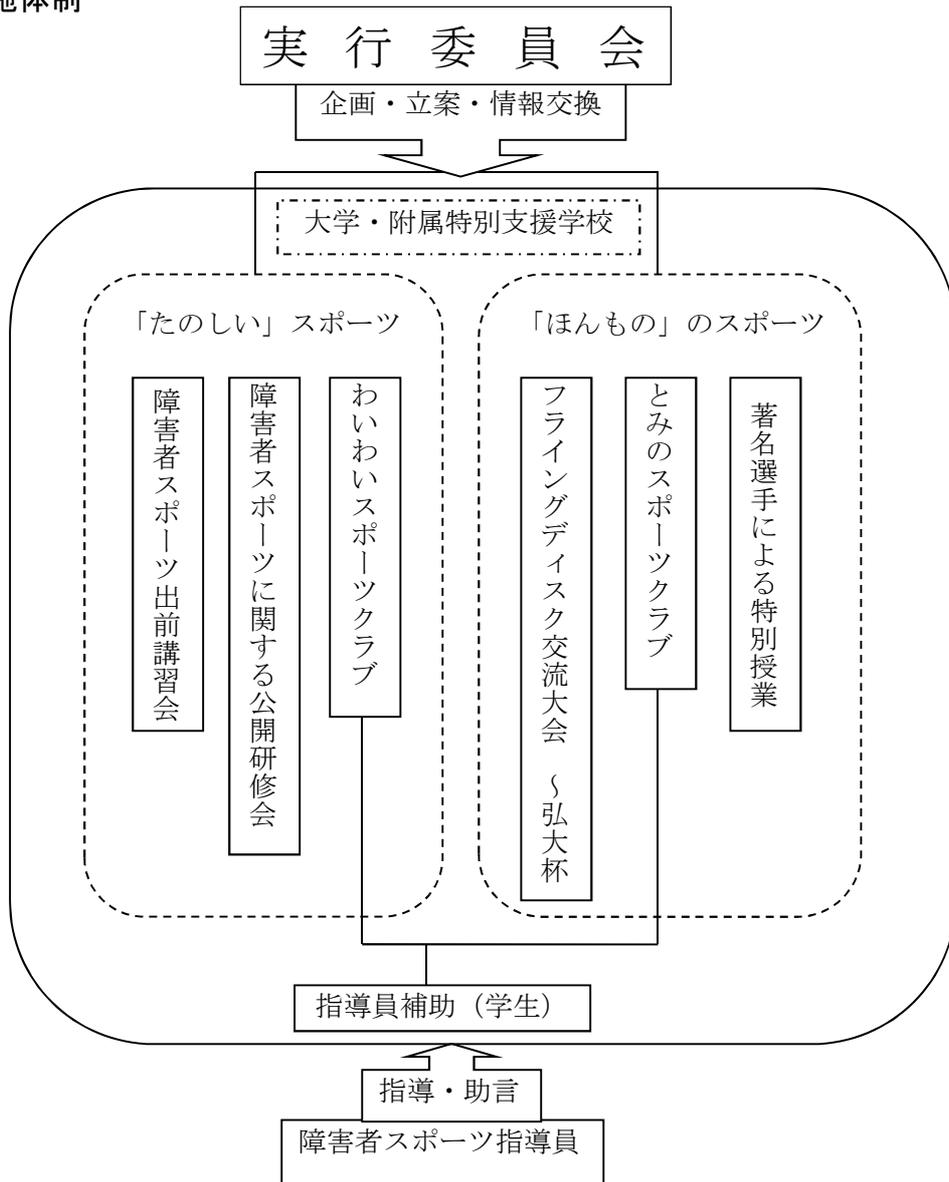
事業を進めるにあたり、「児童生徒・保護者・指導者・支援者みんな一緒にスポーツ実践」「情報発信」と重点項目を決めて取り組んだ。その結果、スポーツを媒介として障害のある人もない人も自然体で心を通わせながら一緒に活動に取り組むことにより、スポーツへの興味や関心を高めることができ、人と人とを結び付けるスポーツの力の大きさと、今後の共生社会の形成に向けたスポーツの可能性を見いだすことができた。そして、本学と附属特別支援学校には、障害者スポーツを支える人材の育成をはじめとする障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための基盤をつくることができた。

しかし、障害児・者が継続的にスポーツ活動を実践するためには、新たな課題として、更にスポーツ活動の幅広い体験ができる機会を設けること、更なる保護者への情報提供をすること、そして、物理的な環境と人的な環境の整備を行うことなどの必要性が明確となった。

この新たな課題に対応するため、本事業では、障害児・者がスポーツを楽しめるスポーツ教室の開催等を通して、障害児・者や関係者のみならず地域の人々の障害者スポーツへの意識や視野の広がりを目指すと同時に、障害者スポーツ振興の地域拠点となることを目指す。併せて、「ほんもの」のスポーツに触れる機会を通して、障害者スポーツにおける競技力の向上を目指す。

本事業では、特別支援学校等を有効に活用した実践的な研究を通して、地域における障害者スポーツの更なる拠点づくりを推進する。

## II 事業実施体制



## III 活動方針

今年度はスポーツ活動の幅広い体験ができる機会を設けること、そして、物理的な環境と人的な環境の整備を行うことを課題としている。そのために、障害児・者がスポーツを楽しめるスポーツ教室を開催するとともに、特別支援学校等を有効に活用した実践的な研究を通して、地域における障害者スポーツの更なる拠点づくりを図り、障害者スポーツ振興の地域の拠点を構築する。

## IV 事業内容

### 1 実行委員会

- (1) 目的 幅広いスポーツ経験を通して、スポーツの基盤をつくり、地域における障害者スポーツの拠点づくりに繋げるための、附属特別支援学校及びスポーツクラブでの活動内容や、将来有望なアスリートの発掘・育成のための、合同部活動及びスポーツ大会等の計画立案及び実施について検討する。

- (2) 期 日 1回目：平成29年6月8日（木）  
2回目：平成30年1月10日（水） 計2回実施

(3) 実行委員会会議録（付録1, 2）

(4) 成果と課題

実行委員会での意見・情報交換のみならず，委員会開催後も地域の関係者として，人材育成やネットワークづくりで連携し，障害者スポーツの拠点づくりを図ることができた。しかし，今回の委員会で計画し取り組んできた内容は，特別支援学校や特別支援学級に在籍している児童生徒を対象としたスポーツ活動が中心となるため，今後は在籍中に経験してきたスポーツを継続し，生涯を通して行っていける環境作りについて，検討していく必要があると考える。

## 2 実践研究の目的

(1) 特別支援学校等を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

障害者スポーツ指導員による幅広いスポーツ経験の拡大を図り，スポーツの基盤づくりと地域の拠点づくりを促進

(2) 特別支援学校等における体育・運動部活動等の推進

「ほんもの」のスポーツに触れる機会を通して，目標を高くもち，アスリートを目指したスポーツイベント参加の促進やアスリート育成を目指した合同部活動の実施

## 3 実践研究の具体的取組内容

(1) 特別支援学校等を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

ア わいわいスポーツクラブ

- (ア) 期 日 1回目 平成29年12月16日（土）10：00～11：30  
2回目 平成29年12月27日（水）10：00～12：00  
3回目 平成30年 1月20日（土）13：30～15：30

(イ) 参加者 近隣の特別支援学校，特別支援学級に在籍している児童生徒

- 1回目 8名，学生スタッフ 7名  
2回目 30名，学生スタッフ 9名  
3回目 17名，学生スタッフ23名

(ウ) 内 容 1回目 スポーツチャンバラ

講師：増田貴人（弘前大学教育学部准教授）

2回目 ボッチャ

講師：中嶋実樹，工藤美聡（附属特別支援学校教諭）

3回目 バスケットボール

講師：本間正行（弘前大学教育学部教授）

(エ) 参加者の声

- ・みんなすごく楽しそうでした。強い子も力の弱い子も危険なくできるのがすごくよいと思いました。
- ・このスポーツを初めて知りましたが楽しく，簡単にできるスポーツで意外と積極的に参加していたのでよかったです。
- ・思いのほか，真剣になります。皆でやるのが楽しいです。

- ・パラリンピック大会の競技を体験できてとても楽しかったです。テレビにこの競技が入れば自分もやったあと思うので、いい体験ができました。家でも兄弟達でやりたいと思います。
- ・いろいろなスポーツを継続してほしい。

(オ) 成果と課題

初めての取組であり、回数も少なかったが、参加者の声からも、地域におけるスポーツ教室の需要があることが分かった。今後、継続的にスポーツ教室を開催するに当たり、地域や障害者スポーツ指導員との連携を通して、安心して参加でき、幅広いスポーツ経験ができる環境作りが必要である。

スポーツチャンバラ



ボッチャ



バスケットボール



## イ 障害者スポーツに関する公開研修会

(ア) テーマ ” バルシューレ”

1部 講演・実技「バルシューレ理論と実践」

2部 フォーラム「特別支援学校におけるバルシューレの可能性」

(イ) 日 時 平成29年8月7日(月)

1部 10:00~12:00

2部 13:00~15:00

(ウ) 場 所 弘前大学教育学部附属特別支援学校

(エ) 講 師 北海道教育大学岩見沢校 准教授 奥田知靖氏

(オ) 参加者 県内の特別支援学校教諭, 市内小学校教諭, 施設職員, 学生, 等  
40名参加

(カ) 参加者の声

- ・実際に体を動かしながら体験できて分かりやすかった。
- ・障害の度合いが違う子供たちでもルールが簡単なので, できそうだなと思った。
- ・理論だけでなく, 実際に自分で体を動かしてやってみることで, 子供の立場に少し立てたような気がします。実技は楽しかったです。
- ・運動領域につながる部分が多く, 参考になった。

(キ) 成果と課題

実技研修を実施したことで, 理論とともに体験しながらバルシューレを学ぶことができ, 参加者から「楽しい」との声が多かった。「楽しい」ということを経験した指導者は, 「楽しさ」を教えられる指導者として, 様々な機会において学んだことを伝えていくことが期待でき, 今回は, そのような指導者の育成に繋がる研修会となった。しかし, 参加者からは, 「様々なアダプテッドスポーツやパラリンピック種目の講習会をして欲しい」という声が聞かれた。



## ウ 障害者スポーツ出前講習会

(ア) 期 日 平成29年度6月~12月 \*要請に応じて実施

(イ) 内 容 ①出前講習会

②スポーツ用具の貸出

(ウ) 実施回数 ①2件…県立特別支援学校

(ボッチャ1件, フライングディスク1件)

②6件…県内特別支援学校

(ボッチャ2件, フライングディスク3件)

弘前市スポーツレクリエーション

(フライングディスク1件)

## (エ) 成果と課題

用具の貸し出しを行うことにより、未経験のスポーツに取りかかりやすいという声が聞かれ、近隣の特別支援学校等でもフライングディスク等を導入した体育の授業が実施された。しかし、出前講習会では申込件数が少なかった。理由としては、対象者を職員に限定したこと、派遣できるスポーツ種目が利用者の希望種目とマッチしていなかった等が考えられる。また、職員のスキルにより活動内容等に変動があるため、安定した活動計画を組むことが難しい側面もあった。

次年度は、用具の貸し出しを中心とするとともに、スポーツに関する相談等を随時受け付け、必要な対応をしていきたいと考える。

## (2) 特別支援学校等における体育・運動部活動等の推進

### ア フライングディスク交流大会～弘大杯～

(ア) 日 時 平成29年9月16日(土) 9:00～11:50

(イ) 会 場 弘前大学第一体育館

(ウ) 参加者 選手：73名

(本校児童生徒52名、県内特別支援学校児童生徒8名、  
津軽地区小中学校特別支援学級児童生徒13名)

審判：青森県障害者フライングディスク協会指導員12名

学生協力員：41名

(エ) 日 程 9:00～ 9:20 受付  
9:20～ 9:35 開会式  
9:40～10:20 講習会  
10:30～11:40 競技

\*練習・特設コーナー(パラスポーツ紹介)

11:40～11:50 閉会式

### (オ) 競技種目 アキュラシー競技

- ・ディスクを連続10枚投げ、アキュラシーゴールを通過した枚数を記録とした。
- ・ゴールまでの距離は、小学生は3m、中高生は3m・5m・7mのいずれかを選んでもらった。
- ・年齢別に組編成を行い。1組8人とした。

(カ) 表 彰 参加者全員に記録証を授与  
各組3位までメダルを授与

(キ) 参加費 無料

### (ク) 参加者の声

- ・メダルをもらってとても喜んでいました。また開催してほしいです。
- ・大学生のボランティア、とてもよく頑張っていたらしかったです。
- ・初めて参加しましたが、フライングディスクは誰もが気軽に楽しめるとてもよいスポーツだと思いました。

- ・ 昨年一枚も入らず本人も残念そうでしたが、今年は何枚か入り達成感で嬉しそうでした。そのような場面を見る機会も少ないので、見学できとても嬉しく思います。
- ・ 協力してくださった学生さんありがとう。おかげ様です。
- ・ お疲れ様でした。これを機会に広く周知され年齢を重ねても楽しめるものにして下さい。ありがとうございました。

(ケ) 成果と課題

競技のルールがシンプルであるため、初めての参加者でも気軽に競技を楽しめたり、経験者も記録の向上を目指して参加したりすることができた点が良かった。また、昨年度に引き続き障害者フライングディスク協会の指導員や学生協力員など外部の人々と連携して運営でき、今後も継続して開催する上でのひとつの型となった点も成果として挙げられる。

今後の課題としては、競技までの待ち時間を短くすることや参加者同士の交流場面を増やすことが挙げられる。



## イ とみのスポーツクラブ

- (ア) 期日と回数 7～8月の火曜日と木曜日, 12回実施
- (イ) メンバー 本校在籍の中学部・高等部希望者13名
- (ウ) 内 容
- ・青森県障害者スポーツ大会に向けての練習実施
  - ・種目: 陸上競技, フライングディスク
  - ・場所: 本校グラウンド, 市営陸上競技場(夏期休業中)
  - ・青森県障害者スポーツ大会に出場

### (エ) 成果と課題

とみのスポーツクラブの参加者は, それぞれが大会に向けて明確な目標をもち, 達成しようと努力して練習に取り組んだことで, 競技力の向上に繋がり, 競技スポーツに対する意識の高まりが感じられた。また, 大会への参加を通して, スポーツ経験の拡大に繋がったと考える。

しかし, 今後は, クラブ組織計画を作成し, 密度の高い練習ができるように計画していくことや, 近隣の特別支援学校合同練習を実施し, より多くの参加者が一堂に集まってレベルアップを図るための活動が必要であると考えます。



(ア) 「体験しよう！新体操教室」

日 時 平成29年9月6日（水） 10:50～12:00

場 所 附属特別支援学校 第二体育館

講 師 青森県立弘前実業高等学校 男子新体操部

対 象 全校児童生徒

内 容 青森県立弘前実業高等学校男子新体操部部員による新体操演技（個人演技（5種目）団体演技（2チーム））の鑑賞，及び新体操部顧問のリード及び新体操部部員の補助による体験教室（4コースから自由選択）を実施した。

実施状況 演技観賞では食い入るように見つめ，子供たちからは，自然と感動による拍手が沸き起こった。また，新体操部員の補助による体験教室では，ほぼ同世代の高校生とのふれあいを通して普段の授業では見られないような笑顔と意欲があふれていた。



(イ) 「ゴー！ゴー！サッカー教室」

日 時 平成29年11月21日（火） 10:05～14:05

場 所 附属特別支援学校 第二体育館

講 師 フットサル選手 杉本 聖和選手

（元 イタリアセリエA2 Atlante Grosseto 所属）

特定非営利活動法人 トラッソス 副理事長 吉澤 昌好さん

対 象 全校児童生徒

内 容 杉本聖和選手と吉澤昌好さんのお話

サッカーのパフォーマンス鑑賞

質問タイム

記念撮影

学部毎のサッカー教室

実施状況 全校授業では，クイズを交えた杉本選手の紹介とパフォーマンスの鑑賞をした。ボールを背中に乗せて，さらに腕立て伏せ，そして圧巻のシュートと，プロの技に大歓声が上がった。学部毎の授業では，年齢に合わせた内容でウォーミングアップやミニゲームを行い，大いに盛り上がりだった。

## (ウ) 成果と課題

体験したことのない又は知らなかったスポーツを実際に体験し、知ることでできる機会として、児童生徒は勿論のこと教員や保護者にとっても、とても良い教室となり、良い刺激となった。「ほんもの」のスポーツを身近に感じる機会にもなった。児童生徒の楽しそうで、生き生きとしている姿がとても印象的であった。今年度は、講師として地域の高等学校の生徒を招いたことにより、同世代の生徒との交流の場にもなった。参観に来た保護者を対象としたアンケートからは、「児童生徒が興味津々で座って話を聞いていてすごい」「このような取組を継続してほしい」など、前向きな感想や意見が出された。しかし、本事業終了後、特別講師を招いての活動をどのように維持していくのか、課題が残る。



## (3) 津軽地区のスポーツ実態調査 (付録)

## V 事業成果

### 1 事業成果

本事業により、開催した実行委員会は、本学及び附属特別支援学校が地域における障害者スポーツの拠点となる上での、人材育成やネットワークづくりに繋がった。そして、各事業に関わる活動の情報提供とともに、参加者募集への周知へと繋がり、参加者に少しずつ広がりが見られた。参加者や指導者の中には、「実際にやってみないと分からないものだった」「こんなに楽しいと思わなかった」「またやりたい」などの声が聞かれ、障害者スポーツの経験の拡大に繋げることができたと考える。

「ほんもの」のスポーツに触れる機会を設定することにより、本校児童生徒や参加者は、個々に感動を感じ、目を輝かせながらスポーツ選手を見つめ、「自分も選手になりたい」「スポーツをやりたい」といった、目標をもつ児童生徒や参加者もいた。

また、活動への参加をきっかけとして、家庭で用具を購入してスポーツに取り組む児童生徒もいたことから、競技スポーツへの視野の広がりや、スポーツに対する意識の高まりを感じることができた。

上記のことから、今年度、本事業実施に伴い、地域における障害者スポーツの拠点としての機能向上に繋がっていることを実感した。

## 2 既存事業・体制と本事業との関係

平成28年度「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」を通して、障害者スポーツを支える人材の育成を含め、それぞれの役割で参加する障害者スポーツへの広がりや可能性を感じとることができた。

平成29年度は、「Special プロジェクト2020」の実施により、障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための取組を通して、スポーツ教室の必要性を感じとることができたとともに、地域と連携して取り組める方向性が見えてきた。また、参加者はいろいろなスポーツを経験することができたことにより、興味・関心の幅や競技スポーツまで視野を広げることに繋がった。

## 3 事業課題

本事業や、地域の実態調査の結果から、スポーツ活動を推進していく上で学校が主催するスポーツ活動への期待は大きいと考えられ、障害者スポーツにおける学校に寄せられた地域のニーズや期待は、本校が想定する以上に大きいものだった。そして、課題として下記の4点が上げられた。

- ①保護者の付き添いの負担軽減
- ②レクリエーション・スポーツのニーズ
- ③生涯を通してスポーツができる環境づくり
- ④情報の周知の方法

上記の課題を解決するためには、「会場までの送迎や運営のためのボランティア及び指導員のソフト面の整備」「地域のスポーツクラブや地域行政との連携」「情報周知の方法の整備」等が考えられる。

上記の事項を受け、今後、より参加しやすいスポーツに取り組める環境作りを行っていくことがこの地域にとっては、まだ、必要である。

## 付録

津軽地区の特別支援学校・特別支援学級在籍児に対する障害者スポーツ活動への参加とそのニーズの実態調査研究

An investigation into actual condition of participation and its needs of adapted sports activities for children registered in special needs education schools and resource rooms in elementary or junior high school in Tsugaru area

中嶋実樹\*・鳥潟昌也\*・工藤美聡\*・米持里美\*・今夏希\*・白石公德\*・加賀谷紀\*・増田貴人\*\*

Miki NAKAJIMA\*, Masaya TORIGATA\*, Misato KUDOU\*, Satomi YONEMOCHI\*,  
Natsuki KON\*, Kiminori SHIRAISHI\*, Michi KAGAYA\*, Takahito MASUDA\*\*

\* 弘前大学教育学部附属特別支援学校 School for Special Needs Education Attached to the Faculty of Education, Hirosaki University

\*\* 弘前大学教育学部 Department of School Education (Special Needs Education), Faculty of Education, Hirosaki University

### 要旨

弘前大学教育学部附属特別支援学校では、平成 28 年度よりスポーツ庁の事業を受けて、地域における障害者スポーツの推進に取り組んできた。「障害者フライングディスク交流大会」や「わいわいスポーツクラブ」など、地域の特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒も対象としたスポーツイベントを開催してきた。しかし、津軽地区において、特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒のスポーツの取組状況や、今後の取組のための方向性が十分に明らかになっていないのが現状である。本調査では、今後の地域におけるスポーツ活動充実のための示唆を得ることを目的として、特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒の保護者を対象にスポーツにかかわる実態調査を実施した。その結果、児童生徒のスポーツの取組状況、保護者のスポーツ活動への意識などが明らかになった。津軽地区での障害者スポーツ活動の拡充のためには、保護者の付き添い負担の軽減や情報周知、競技よりもレクリエーションを志向した活動の模索、人的資源の充実が課題として示された。

### I 問題と目的

東京オリンピック・パラリンピックの招致をきっかけとして、障害者スポーツに対する社会的関心が高まってきているように思われる。しかしながらマスコミ等が注目するのは、あくまで高いパフォーマンスを示すトップアスリートに偏っており、平成 29 年度障害者白書にも「障害のある人（成人）の週 1 回以上のスポーツ・レクリエーション実施率は 19.2%(成人全般の実施率は 42.5%)にとどまっており、地域における障害者スポーツの一層の普及促進に取り組む必要がある」と記されるように、地域に根ざした障害者スポーツ活動の普及・推進は未だ課題として残されている。

弘前大学教育学部附属特別支援学校（以下本校）では、平成 28 年度からスポーツ庁より「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」を受けて学習活動及び地域における障害者スポーツ活動の充実に向けて取り組んでいる。平成 29 年度もスポーツ庁委託事業「special プロジェクト 2020」を受け、学校内外において、障害者スポーツの推進に向けて取り組んできた。スポーツは余暇活動のひとつとしても、生涯にわたる健康面への効果が期待されている。成人以降の実施率を高めるためにも学齢期から様々なスポーツに親しむ経験を積み重ねていく必要であると考え、本校では体育の授業の他、児童生徒の興味関心をもとに取り組みたいスポーツに親しむ「チャレスポタイム」の時間を設定したり、著名なスポーツ選手を講師として招き、特別教室を開催したりするなど、児童生徒のスポーツ活動の推進を図ってきた。本校でのこれまでの取組や姿勢を地域の中でも共有し、共に障害者スポーツ活動を推進していきたいと考えている。

しかしながら本校が主催してきた津軽地区の特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒を対象としたスポーツイベントでは、本校以外からの参加者は少なかった。今後もスポーツイベントを継続していくために、その背景にある要因について把握していく必要があると考えている。加えて、現

状において津軽地区における特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒のスポーツの取組状況や、取り組むための方向性が十分に明らかになっているとは言えない。そこで、本調査では津軽地区における、特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒のスポーツへの取組状況や保護者のスポーツへの意識を明らかにし、今後の地域におけるスポーツ活動充実のための示唆を得ることを目的とする。

## II 方法

津軽地区の特別支援学校・特別支援学級に在籍する児童生徒の保護者を対象に、大まかに「属性」「一般的なスポーツへの取組状況」「障害者スポーツへの取組状況」「スポーツ活動への参加ニーズの把握」の4つの内容で構成された質問紙を用いて調査を行った。

調査用紙は、2017年11月22日～12月6日の期間に、津軽地区の特別支援学校及び特別支援学級を通じて保護者に調査用紙を計865枚配布し、郵送にて回収した。

「属性」「一般的なスポーツへの取組状況」「障害者スポーツへの取組状況」はそれぞれ単純集計とした。「スポーツ活動への参加ニーズの把握」については、守田・七木田(2004)を参考に、障害者スポーツの参加ニーズについて、『運営主体』『開催頻度』『指導者』『保護者の付き添い』の4要因に絞り込み、それぞれの要因に対していくつかの水準を作成した(今回の調査で設定した要因および水準を **Tab 1** に示す)。

これらについて、SPSS22.0を用いたコンジョイント分析法の手続きに基づいて12の組み合わせを検出し、回答の際は5件法にて得点化した。得点が高いほどニーズが高いことを示す。なおコンジョイント分析法は市場調査などでよく用いられ、回答者が持つニーズについて、重視されている要因を視覚的に捉えやすいことに加え、調査者が設定した要因と水準の組み合わせのシミュレートにより、調査結果の実現性が高いものとなる特色がある(真城, 2001)。

本調査は、倫理的配慮として、調査協力は利用者の自由意思であること、研究以外の目的でデータを使用しないこと、また、個人の情報が第三者に渡ることがないこと等の倫理面に関する事項を質問紙に明記したうえで、無記名での調査を行った。

**Tab 1 コンジョイント分析における要因と水準**

要因	水準
運営主体	民間のスポーツクラブ/学校/福祉サービス 児童デイサービス等)
開催頻度	毎週1回程度/隔週1回程度/毎月1回程度
指導者	体育が専門/特別支援が専門/体育 特別支援両方が専門
保護者の付き添い	付き添いなしも可/付き添いが必要

## III 結果

### 1. 回収状況と属性

回収数は504枚(回収率58%)であった。以下回答者の属性を示す。

#### (1) 性別

回答者は「男性」が15%、「女性」が85%であった。

#### (2) 年代について

回答者の年代は20歳代が1%、30歳代が29%、40歳代が52%、50歳代が15%、60歳代2%、未記入が2%であった。

#### (3) 地域について

回答者の居住する地域は「弘前市」(50%)、「黒石市」(9%)、「平川市」(8%)、「南津軽郡」(8%)、「五所川原市」(7%)、「つがる市」(5%)、「北津軽郡」(5%)、「青森市」(浪岡地区)(2%)、「西津軽郡」(2%)、「中津軽郡」(1%)となった

#### (4) 子どもの性別

回答者の子どもの性別は「男児」が64%、「女児」が35%であった。

## (5) 障害の種類

障害の種類は「発達障害」(34%)、知的障害(33%)、知的障害と他の重複(19%)、肢体不自由(5%)、その他(4%)、知的障害を含まない他の重複(2%)、視覚障害(1%)、聴覚障害(1%)であった。

## 2. 「一般的なスポーツへの取組状況」の項目

### (1) 日頃のスポーツへの取組の有無

『日頃スポーツをしていますか』の質問について、「はい」が 26%、「いいえ」が 72%、「未記入」が 2%であった。「はい」と答えた中で、取組の頻度を見ると、「週 1~3 日」が 46%、「週 3 日以上」が 24%、「月 1~3 日」が 27%、「3 カ月に 1~3 日」が 1%、「年 1~3 日」が 2%であった。「いいえ」と答えた中で、スポーツをしていない理由を 11 項目(複数回答可)から答えてもらうと、「保護者が仕事・家事等が忙しくて時間がないから」が 19%、「本人が運動・スポーツが好きではないから」、「機会がなかったから」がともに 16%と他の項目と比べて高かった(Fig 1)。一方で「いいえ」と答えた中で、『お子さんにスポーツをやらせたいと思いますか』の質問に対し、スポーツをやらせてみたいと 54%の回答者が答えていることから、条件を整えばスポーツに取り組ませたいという思いがあることが推測できる。

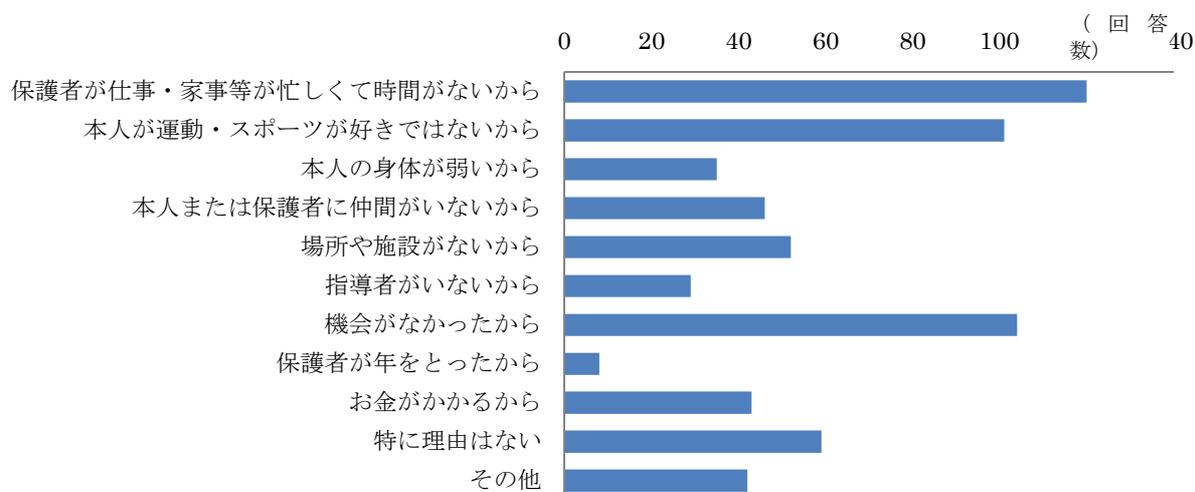


Fig 1 スポーツをしていない理由 (複数回答可)

### (2) スポーツ大会やスポーツイベントへの参加状況

『今までのスポーツ大会や各種スポーツイベントに参加したことはありますか』の質問について、「はい」が 34%、「いいえ」が 63%、未記入が 3%であった。回答者のうち、半数以上が参加したことがないことが示された。

### (3) スポーツをすることの意義について

『スポーツをすることの意義は何だと思えますか』の質問について、9 項目の中から、考えに近い順に第 1 位~第 3 位まで順位付けして回答してもらった(Fig 2)。各項目のうち、「健康・体力づくりのため」が最も高く、次いで「楽しみ・気晴らしのため」「運動不足の解消のため」「友人・仲間との交流のため」の割合が高くなっていた。

この質問について特別支援学校(Fig 3)・特別支援学級(Fig 4)で比較してみると、全体の割合とほとんど同じような傾向であるが、特別支援学級の場合「精神の修養と訓練」の項目が高くなっていることが分かる。

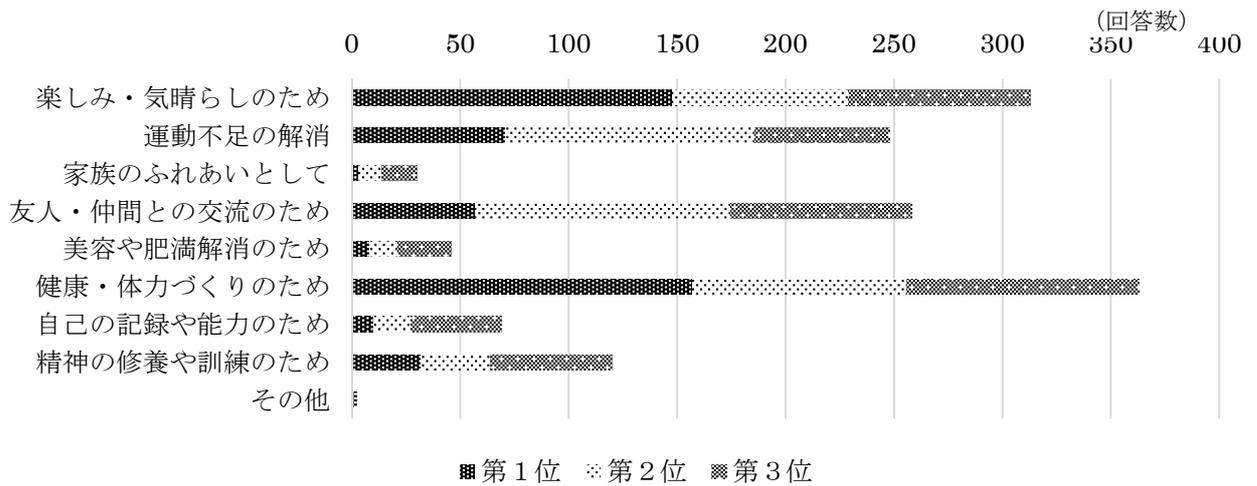


Fig 2 スポーツの意義についての意識（全体）

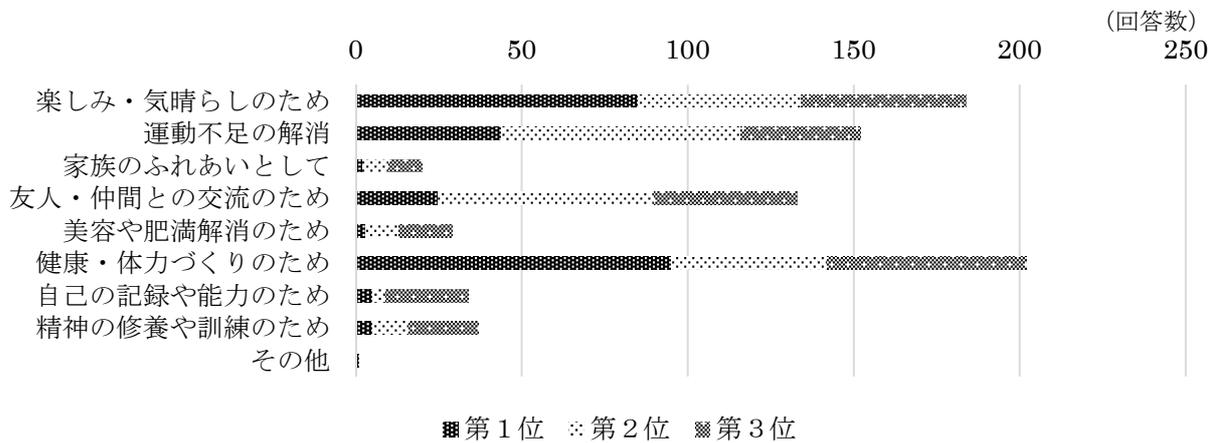


Fig 3 スポーツの意義についての意識（特別支援学校の場合）

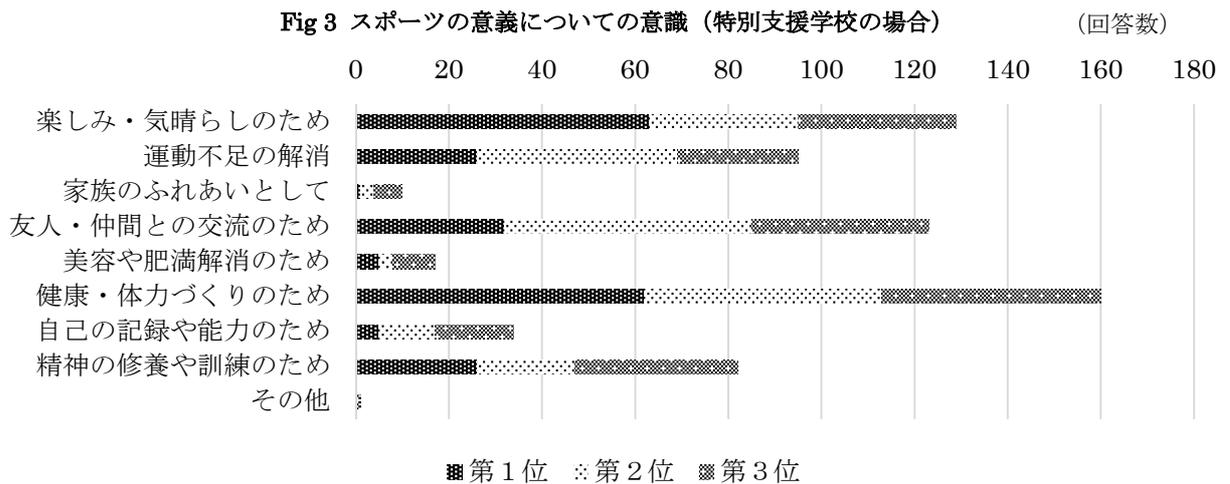


Fig 4 スポーツの意義についての意識（特別支援学級の場合）

#### (4) スポーツ振興にかかわるニーズについて

『スポーツをもっと振興させるために、国や都道府県、市町村に今後どのようなことに力を入れてもらいたいと思いますか』の質問について、18項目の中から、考えに近い順に第1位～第3位まで順位付けして回答してもらった(Fig 5)。

最も多かったのが「障害者のスポーツ・レクリエーション活動の推進」、次いで「スポーツ指導者の養成」、「各種スポーツ大会・大会・教室の開催」、「スポーツボランティアの支援」の順となった。

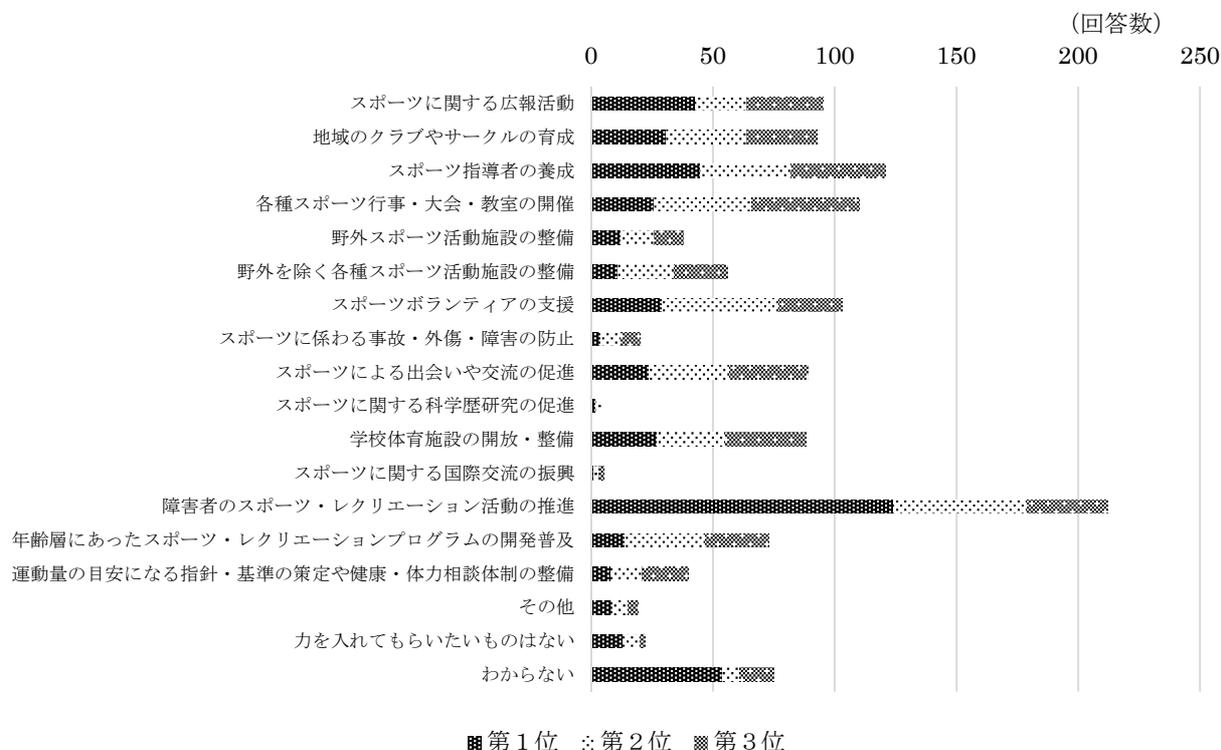


Fig 5 スポーツ振興のために国や都道府県、市町村に今後力を入れてもらいたいこと

### 3. 「障害者スポーツへの取組状況」の項目

#### (1) 障害者スポーツの語の認知について

『障害者スポーツという言葉を知ることがありますか』の質問について、「はい」が72%、「いいえ」が25%となった。この質問について特別支援学校(Fig 6)・特別支援学級(Fig 7)で比較してみると、特別支援学級の回答者の方が「いいえ」の割合が高かった。

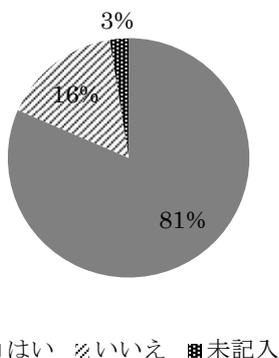


Fig 6 障害者スポーツという語の認知度 (特別支援学校)

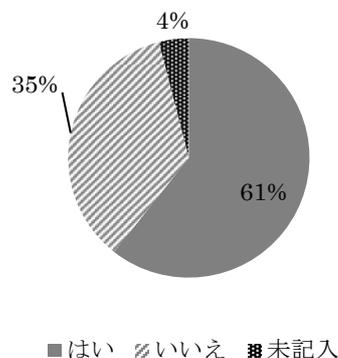


Fig 7 障害者スポーツという語の認知度 (特別支援学級)

## (2) 障害者スポーツの各種大会について

『障害者スポーツの各種大会を知っていますか』の質問について、「はい」が41%、「いいえ」が57%となった。この質問について特別支援学校(Fig 8)・特別支援学級(Fig 9)で比較してみると、特別支援学級では7割以上の回答者が「いいえ」と答えていた。

また、「はい」の回答者から『どのような手段で知りましたか』という質問に、9項目の中から複数回答してもらった(Fig 10)。情報を得た手段として「学校からのお知らせ」, 「テレビ」が多くを占めていた。

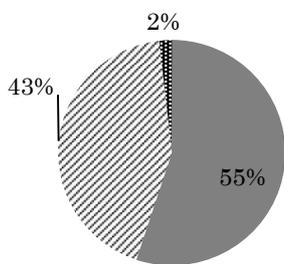


Fig 8 障害者スポーツの各種大会の認知度 (特別支援学校)

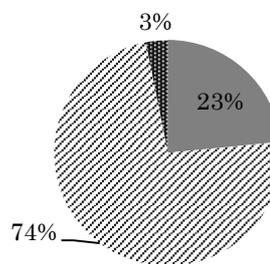


Fig 9 障害者スポーツの各種大会の認知度 (特別支援学級)

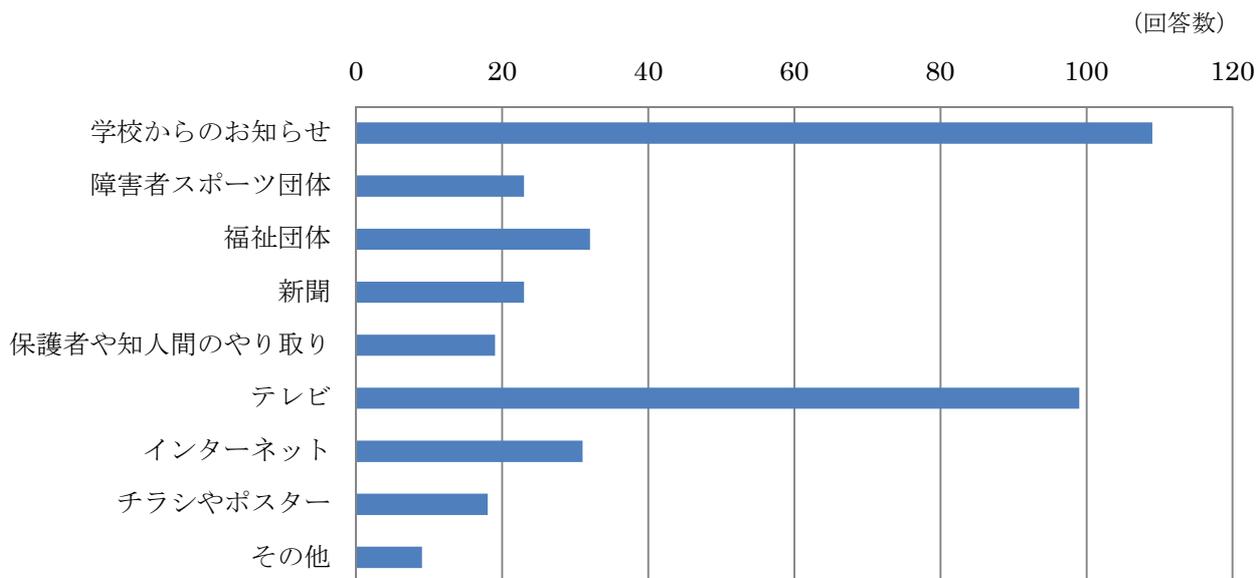


Fig 10 障害者スポーツを行うときの今の課題

## (3) 障害者スポーツを行うときの今の課題について

『障害者スポーツを行うときの今の課題は何ですか』という質問に、5項目から複数回答してもらった。「近隣の活動についての情報不足」が42%と最も多く、次いで「交通手段」が20%、「指導者がいない」が20%、「参加費」が9%、「その他」が9%となった。

#### 4. 「スポーツ活動への参加ニーズの把握」の項目

Fig 11-1~3 は、回答者が子どもに障害者スポーツへの参加を促す際に、『運営主体』『開催頻度』『指導者』『保護者の付き添い』の4要因のうち、どれを重視すると回答したのかを示したものである。本研究におけるコンジョイント分析結果での相関係数は高く、予測性が高い結果が得られたと判断できる。全体で得られた結果は、特に特別支援学校でその傾向が強く打ち出されていた。

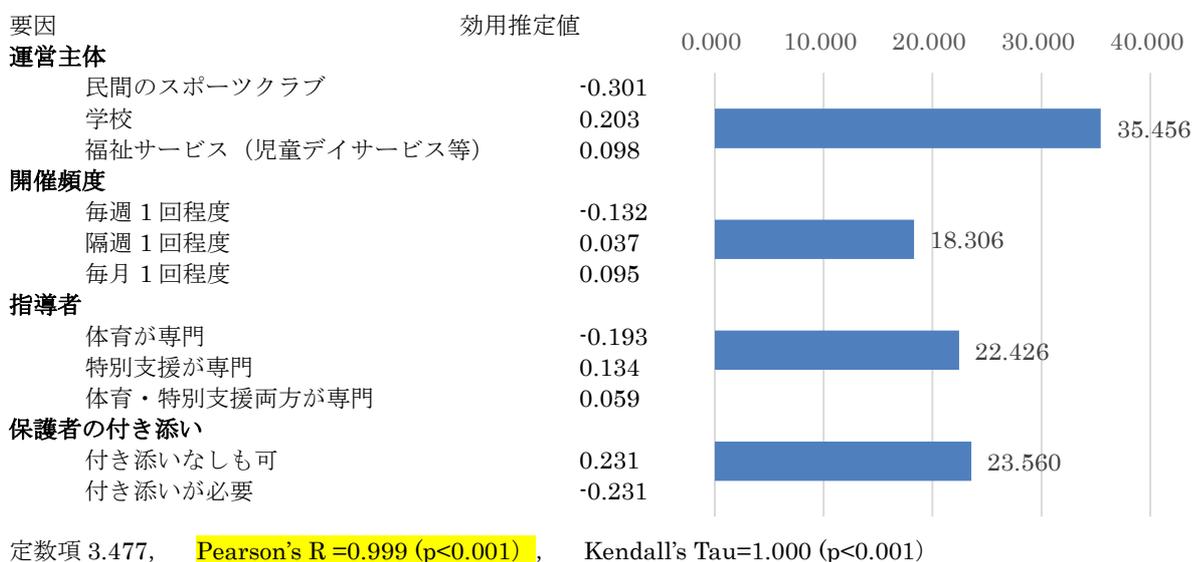


Fig 11-1 障害者スポーツの参加の規定要因（全体）

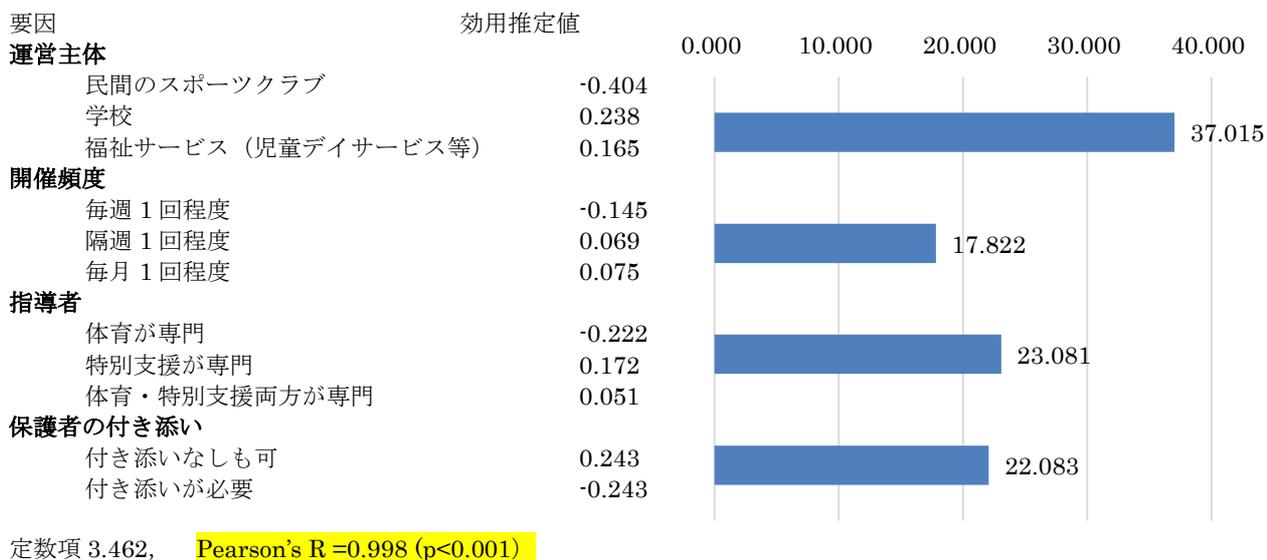


Fig 11-2 障害者スポーツの参加の規定要因（特別支援学校）

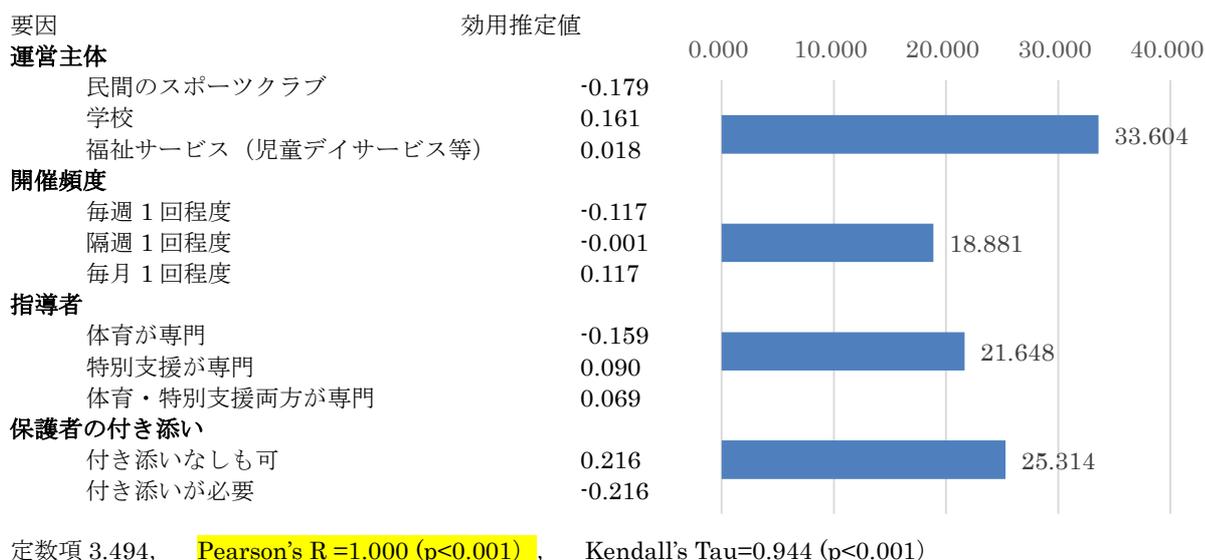


Fig 11-3 障害者スポーツの参加の規定要因（特別支援学級）

#### IV. 考察

本調査を通して、今後津軽地区においてスポーツ活動を推進していく上で次のような示唆を得ることができた。

第一に、保護者の付き添い負担の軽減が必要と考えられたことである。回答した保護者は、日頃は子どもがスポーツをしていないが、させたいと考えていたようである。その背景として「保護者が仕事・家事等が忙しくて時間がないから」のような保護者が引率可能かどうかの要因はとても大きいと考えられる。このことは障害者スポーツの参加ニーズとしても、『保護者の付き添い』については「付き添いなしも可」を選択していたところや、『開催頻度』をそれほど重視していないことからもうかがえた。あまり頻繁になって子ども本人の負担や送迎等保護者の負担が大きくなることをかえって懸念しているようでもあり、付き添いによる保護者の負担感は、かなり大きいものと推察される。保護者の付き添いによる負担感が軽減されるように、会場までの交通手段やイベントのボランティアなどのソフト面を整えていくことが必要であることが推測できる。

第二に、障害者スポーツの参加に関する情報の周知がまだ十分ではないと推察されることである。回答者がスポーツに取り組ませる上での課題と挙げていたことのなかに、「機会がなかったから」があげられていた。障害者スポーツについては、特別支援学校と特別支援学級の間で情報の差が見られた。障害者スポーツの各種大会を知っていると回答した方の多くが情報を得た手段として、学校からのお知らせやテレビを選択していることから、発信者が情報を行き届かせるためには、これらの方法を用いていくことが有効であることが推測できる。そのうちテレビは実施後の報道という形で伝わるが多いため、大会やイベントへの参加を促していくためには、学校を通したお知らせが適していると思われる。発信者も確実に保護者の手元に届くような工夫が求められる。

第三に、障害者スポーツには、競技性よりも、仲間との交流や生涯学習を含む生活の質向上が求められていたと考えられたことである。回答者はスポーツに取り組ませる上で「健康・体力づくり」「楽しみ、気晴らし」「運動不足解消」「友人、仲間との交流」の4点を重視していることから、競技性よりも気軽に楽しめる内容のレクリエーション・スポーツを求めていることが推測できた。この結果は子どもの年齢にかかわらず共通していた。「本人が運動・スポーツが好きではないから」をスポーツに取り組ませる上での課題と挙げていた回答もあったが、仮に本人がスポーツを好まない性格だったとしても、障害者スポーツを機会に地域参加を促していくことは望まれているように思われる。

このことは障害者スポーツの参加ニーズとしても、『指導者』については「体育が専門」よりも「特別支援が専門」を望んでおり、特別支援学校在籍児ではそれが特に顕著だった。これは、専門的な体育指導よりも個に応じた配慮を求めていると考えられる。「体育・特別支援両方が専門」については、実際にはそのような人材が津軽地域にはあまり多くはなく、実際にイメージしにくかったと推察され、そのことが影響したかもしれない。これらの傾向は特別支援学校に強くみられたが、特別支援学校在籍児にとって、スポーツを含む地域参加そのものに大きい壁があると感じていたことが推察

される。

第四に、障害者スポーツに関する人的資源の充実である。スポーツ振興に関する質問からは、スポーツに取り組める機会の提供とともに、運営のスタッフへのサポートを求めていることが分かった。しかしながら、ニーズ内容は多岐にわたるので一つの機関で対応していくには難しいのが現状である。障害者を支援している様々な機関や団体が連携して、それぞれの立場で協力できる内容を出し合い、役割分担していくことで、子どもたちがスポーツに取り組める場や環境を整備していく必要がある。

おそらく、これら 4 つの示唆を現実的に最もカバーできそうな存在として、学校が期待されているのかもしれない。障害者スポーツイベントへの参加については、『運営主体』，なかでも保護者・子ども両者に身近な「学校」が最も重視されていたことは象徴的である。その点では特に学校が主催するスポーツ活動への期待は大きいと考えられ、障害者スポーツにおける学校に寄せられた地域のニーズや期待は、本校が想定する以上に大きいものだったと考えられる。今後この期待に応えられるような、現実的かつ継続可能な方策を探っていくことが課題として残された。

#### 文献

内閣府（2017）：平成 29 年度版障害者白書.内閣府.

内閣府（2015）：東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査.内閣府.

真城知己（2001）：SPSS によるコンジョイント分析. 東京書籍.

守田香奈子・七木田敦（2004）：知的障害者のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究—保護者への調査を通じたニーズの把握—。障害者スポーツ科学，2，70-75.

平成29年度「Specialプロジェクト2020」  
実行委員会名簿

	氏 名	所 属 ・ 職 名
1	福 沢 和 彦	青森県障害者スポーツ指導員会・会長
2	竹 内 雅 宣	青森県身体障害者福祉センター・主事
3	相 馬 純 子	青森県立弘前聾学校・校長
4	佐 藤 龍 太	弘前市健康福祉部福祉政策課・係長
5	長谷川 竜 太	弘前市文化スポーツ振興課・主査
6	三 國 美 香	スペシャルオリンピックス日本・青森支部・事務局長
7	福 田 寛	青森県立弘前第一養護学校・教諭
8	小 野 奈津子	青森県立弘前第二養護学校・教諭
9	車 谷 大 樹	青森県立弘前聾学校・臨時講師
10	新 田 将 也	青森県立森田養護学校・教諭
11	河 内 亜 衣	青森県立黒石養護学校・教諭
12	保 村 崇 有	青森県立浪岡養護学校・教諭
13	戸 塚 学	弘前大学教育学部・学部長
14	松 岡 昌 江	弘前大学教育学部・事務長
15	澤 田 和 則	弘前大学教育学部・事務長補佐
16	本 間 正 行	弘前大学教育学部・教授
17	増 田 貴 人	弘前大学教育学部・准教授
18	岩 井 康 頼	弘前大学教育学部附属特別支援学校・校長
19	木 崎 達 広	弘前大学教育学部附属特別支援学校・副校長
20	松 橋 浩 仁	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教頭
21	工 藤 美 聡	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
22	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭

弘前大学教育学部附属特別支援学校 スポーツ推進委員会名簿

	氏 名	所 属 ・ 職 名
1	松 橋 浩 仁	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教頭
2	白 石 公 徳	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
3	加 賀 谷 紀	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
4	工 藤 美 聡	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
5	米 持 里 美	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
6	今 夏 希	弘前大学教育学部附属特別支援学校・講師
7	鳥 潟 昌 也	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
8	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、弘前大学が実施した「平成29年 Special プロジェクト2020」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。